

「東京八景」のなかの山岸外史

佐藤 秀明

昭和十五年七月四日から十、十一日頃にかけて書かれ、翌年一月号の「文学界」に発表された「東京八景」^{*1}は、太宰治中期の作品で、いわゆる安定期のものだと言われている。作品内容も、結婚して生活の安定を得た「私」が、かつてのデカダンスな生き方を回想し、現在の執筆意欲を書いたものである。さすがに一息ついたという感じが出ている。しかし、安定が相対的なものであるにしても、太宰その人をおぼろげに「私」は、本当に安定していると言えるのだろうか。むしろ、不安が見え隠れし、その不安を書こうとしたのが、この「東京八景」ではないかと思われるのである。

「東京八景」は、昭和五年に故郷から東京に出てきた「私」の破綻した生活を語る第一の回想部分と、最近得た「二景」——東京の風景の中に立つ文士としての「私」を描く第二の回想部分とに大別される。そしてその前後に、「東京八景」という小説を書くために、伊豆の温泉宿に滞在する「私」のことが語られる。

一読して気づくのは、この小説には異様に多くの地名が

書かれ、人名がほとんど出てこないことである。第一の回想は、東京帝国大学に入学したものの授業には出ず、非合法運動に加担して度々住まいを替え、小説を書き出して卒業を延ばしたこともあり、仕送りを減額されて転居し、盲腸炎の手術後に麻痺剤を常用して転院、転地し、中毒治療のため脳病院に入った後また転居し、妻の「H」と別れて最下等の下宿に移るといふ具合である。その度ごとの地名が細かく出てくる。伊豆行きの途中の地名も、第二の回想内の地名も、ほとんど無用ではないかと思われるものまで記されている。それに対して、人の名前前は、東京帝大の「辰野隆先生」と、俳号の「朱麟堂」、活動家時代の偽名「落合一雄」、「ルソオ」、「芥川龍之介」の五人しかない。「私」の名前も不明ならば、同居していた「H」、「田舎の長兄」、結婚を世話してくれた「或る先輩」、「小石川の大先輩、Sさん」、現在の「妻」と「妻の妹」、その婚約者の「T君」も固有名詞は省かれている。人間関係の重要度と固有名詞との遠近法を崩し、出来事を中心に回想する記述になっているためでもあるが、故郷の共同体から切れた都市生活者の

移動の痕跡が浮かび上がる仕組みになっているからでもある。

安藤宏が言う「周囲の人々との関係を喪失してゆく物語」^{*2}、山下真史の言う「近代」の「個人主義的な人間関係」^{*3}というテーマとも、この叙述方法は結びついている。

「東京八景」に見え隠れする不安は、現在の「私」が、都市の遊民でもなく、社会秩序に組み込まれた勤め人でもないところに生じている。だから不安は、二方向から挟撃する形で襲ってくる批判によって生じる。その一つは、「あいづも、だんだん俗物になつて来たね」という「無智な陰口」である。もう一つは、義妹の婚約者「T君」の嚴父の視線である。「ひがんでゐたのである。T君の家は、金持だ。私は、齒も欠けて、服装もだらしない。袴もはいてゐなければ、帽子さへかぶつてゐない。貧乏文士だ」という感情がその視線から引き出される。「東京八景」の「私」は、かつての無頼派から「転向」したことで「俗物」と言われ、さりとてまともな市民として遇されないと、ひがみの中で、不安に陥りそうになっている。そこをまず捉えておきたい。

しかし「東京八景」は、辛くも「安定」を見せる方向でまとまったのである。それは「私」が、現在の自分を肯定する次のような自覚を得たからである。

人間のプライドの究極の立脚点は、あれにも、これにも、死ぬほど苦しんだ事があります、と言ひ切れる

自覚ではないか。

「俗物」という批判にも、真つ当な生活者からの視線にも拮抗しうる自覚。この小説は、ある意味では、この自覚への到達を描いたものである。いま、ある意味ではと書いたのは、プロットの進路がこの自覚に向かつて一直線に整い、「私」が大見得を切っているわけではないからである。この心境に至った自分を、「東京八景」の最後の一景として加えることで、「東京八景」という作中作の構想が成り、それを「私」が旅先で書こうとすることを書いたのが、太宰の「東京八景」である。太宰一流の含差を感じさせるこのひと捻りした構造については後述するとして、ここでは右の引用部分をもう少し検討してみたい。

安藤宏は、「人間のプライドの究極の立脚点」にシニカルな目を向ける。第一の回想部分に表現された「私」の生き方が、意志的ではなく、ついには人を「信じない」虚無感にまで陥ったことを重視し、次のように述べる。

一方での作品では、人間のプライドの究極の立脚点としての苦しみを、過去に根柢付けることが目ざされていたはずではなかったか。へ無意志であつた事実にいくら強調したとしても、決して現在のへプライドのへ立脚点にはなりえまい。へ遊民の虚無」という否定形でしか過去を語れぬ第一回想部は、明らかに、

現在を生きる根柢を過去に求めるモチーフを裏切っているのである。

これは、鋭い批評的な指摘だと思う。「ブライド」とその「立脚点」との間の齟齬に、語り手である「私」や太宰治が気づいている節はない。とするとこれは、過去を非主体的に生きてきたと強調しすぎた作者の勇み足ということになるのか。事実は必ずしも作品のとおりではなかった。例えば、新聞社に勤める知人夫妻と共同で借りた家に引っ越すとき、「誘はれて私たちも一緒にいて行き」と、なりゆきに任せたような記述があるが、真相は、荻窪駅に近い家を捜してきたのは太宰だったというのである。同人雑誌「青い花」を出すときも、「私は、半ばいい加減であつた」とあるが、同人中では太宰が最も積極的だったと言われている。同人の山岸外史に宛てた昭和九年十一月十六日付けはがきには、「そんなことを言はないで書いて呉れたら、どんなもんぢや。／十八日まで、よいさうだ。ひとつ書け!!!／津村信夫君にも、詩だけでよいから、送るやうに電話で言つてやつて下さい。／たのみます」とあり、同年十二月二十四日付けの山岸宛はがきには「そろそろ二号の編輯たのみます。同人全部に、原稿と同人費のサイソク、「若いひと」にさせたら、どうか。／同人会は、どうです。／私、青い花の原稿いま工夫中」とある。作者は、「転機」以降とのコン

トラストをつけるために積極的な姿勢を抑制し、「無意志」を気取つたのである。しかし、作品の論理としては、「無意志」の生き方に「ブライド」の「立脚点」をおくのは承服しがたいとする安藤の批評は有効だと感じられる。

さらに安藤宏は、「私」が「遊民の虚無」に陥るのは「周囲の人々との関係を喪失してゆく」からで、したがって「人間のブライドの究極の立脚点」をそのような過去に求めるのは、「モチーフとの間」に「必然的に亀裂ははぐむ結果となる」とも言う。以上二つの理由から、「私」が到達した自己肯定の論理に脆弱さを見ているのだが、この点について反論を試みたい。

まず、「無意志」の生き方が、「あれにも、これにも死ぬほど苦しんだ事」にならないとどうして言えようか、ということがある。「無意志」の生き方が苦悩に結びつかないとするのは、健全な側からの判断にすぎまい。「無意志」なるがゆえの苦悩は、最も辛い部類のものではないだろうか。現在の「私」は、その「無意志」の状態をこそ脱したのである。かつての下宿よりも「もつと安っぽく、侘びしい」部屋を温泉旅館の女中にあてがわれても、「怵へてここで仕事をはじめた」とある。「怵へて」「はじめた」ところに、かつてない意志が表れているが、この「怵(へる)」という国字は、「私には侘びしさを怵へる力が無かつた」「私は周

囲の荒涼に怵へかねて、ただ酒を飲んでばかりゐた」と第一の回想部分にも二度使われていて、過去との差異を明瞭に示している。

もう一点は、他者との関係の喪失についてだが、「私」には「生涯の友人」と呼べる人がいたことを忘れてはならない。同人雑誌「青い花」を創刊する際に、「その中の二人と、私は急激に親しく」なり、「私」を加えたその三人は「三馬鹿」と言われ、「生涯の友人であつた」と記されている。その後「私」は麻痺剤中毒、脳病院入院、「H」との離別を経て、仕事もなく作品が書けない状態に陥り、「誰も私を相手にしなかつた」とあるが、「二、三の共に離れがたい親友」は残つたこともある。「離れがたい親友」が「生涯の友人」と同一人であることは、修飾語の強さからいって疑いえない。つまり、「周囲の人々との関係を喪失してゆく」中で、「離れがたい」絆は残り、「遊民の虚無」にも、わずかながら救いがあったことになるのである。したがって、その時期の苦悩に「ブライド」の根拠を置くことに問題はない。そしてこれは後に記すことになるが、そのうちの一人は、第二の回想——「私」の「転機」後の、「Sさん」との関係修復に関わる「親友」にはかならないのである。彼は、第一の回想と第二の回想とをつなぐ人物でもあるのだ。

さて、作品内部に限定して「私」の自己肯定の論拠を検

証してきたが、ここで作品外の事実を導入してみよう。現実とフィクションの間の垣根が低い「東京八景」において、この「親友」の一人に、山岸外史をイメージしつつ読むことは許されるであろう。結婚を世話してくれた「先輩」が井伏鱒二で、破門され縊りを戻すことになった「小石川の大先輩、Sさん」が佐藤春夫であるのは自明で、それを故意に伏せて読むことができないのと同断である。言うまでもなく「三馬鹿」は、太宰と山岸と檀一雄である。

太宰治にとって山岸外史が、気楽な友誼の相手ではなかつたことは注意しておきたい。爾汝の交わりではあつたものの、五歳年長で理屈も立つ山岸は、ときには手強い批判者にもなつたのである。「何百枚かのオハガキを貴兄からいただき、けさのオハガキ、はじめて兄のいたはりのあたたかいものを見せていただきました。真の友情には、お互ひ審判、叱正の他に、やさしいいたはり仕事への敬意を欲しく思つてみました」（山岸外史宛はがき、昭和十一年六月二十四日）とあるところからもそれは窺える。あるいは「けふお手紙読み、君の閉口を知り、わるかつたと思ひました。みぢんもふざけてはゐなかつたのだけれども、私も、思ひちがひしてゐたところあつたやうに思はれます。あれは、とにかく、破つて下さい」（山岸外史宛はがき、昭和十三年十二月三十日）という文面には、太宰に「閉口」させられたこと

をぶつけた山岸の様子が想像される。山岸外史自身『人間太宰治』に、次のように書いている。

多くの太宰の才能への愛着は、太宰にすこしの欺瞞をも許さなかった。「文学の真の貴重さは、そこにあるのではないか。」多くの批評はいつも苛酷であった。あくまでも、純粹人の発想法を要求してやまなかった。当時のぼくは、そんな型の批評家でもあったようである。

このように「純粹人の発想法を要求してやま」ず、「苛酷」でもあった山岸は、しばしば太宰をやりこめたようである。結婚した太宰が、「手堅い文学者の生活を力説した」のに対し、「君こそ、あまり世帯じみないでくれないか。世帯者の文学では困りますからネ」と返したようで、「文学者の生活は自由奔放でいいと考えていたのである。多少の悲劇はやむをえないものだと考えていた」とも書いている。

そういうふうであるならば、「あいつも、だんだん俗物になつて来たね」という批評は、まず身近な山岸外史から出たと見るのが順当であろう。「東京八景」では、そういう評言を「無智な陰口」として切り捨て、あるいは「ぼか共は」と呼んで頭ごなしに他者化しているが、客体化し侮蔑することは強いほど、逆に身近な声として響いていたことを窺わせるのである。穿った言い方をするならば、それは

「私」、そして太宰の内面の声でもあったであろう。しかしもちろん、「私」も太宰もそこから身を引き離さなければならぬし、そう言うであろう山岸は「生涯の友人」として引き留めておかねばならないから、反批判を向ける匿名の虚像をつくって切り捨てたのである。

ということとは、太宰にとって「東京八景」は、「生涯の友人」「親友」と呼んだ山岸外史に対し、己の「俗物」的な「文筆生活」を提示し、理解を求めることにほかならなかったはずだ。昭和十三年十二月十七日付けの山岸あてのほうきにはこうある。

ぼくち、云々、同感。私は、働かなければいけない。太宰も、このごろは、多少、屹つとなつて居ります。少しづつ重量感できました。むかしのニヤケタウソツキの太宰もなつかしいが、あれでは、生きてゆけませぬ。

甲府の下宿屋寿館から発せられたこのはがきは、『太宰治全集』の記載とは異なり、十二月十七日のものと思われる。太宰治は、翌年一月八日に石原美知子と結婚するから、これは結婚の二十日ほど前のはがきである。『ぼくち』とは、おそらく結婚を指してのことであろう。この頃の太宰は新家庭をつくる意欲を固めていたが、「むかしのニヤケタウソツキの太宰もなつかしいが」と、無頼派の山岸に向かって

過去を喚起しつつ、「あれでは、生きてゆけません」と現在の覚悟を伝えていた。それは、「俗物」という予想される批判に対する先回りした態度表明のように読めるし、親身で手強い「敵」への懐柔策のようにも読める。

このように、「東京八景」の「生涯の友人」に、山岸外史という具体的な人物を呼び込んでみると、人間関係が「喪失」（安藤宏）する第一の回想から「転機」を経て第二の回想に至るまで、一人の気になる人物が後景に存在したことが浮かび上がる。作品では、この気になる人物が批判者と「生涯の友人」に切り分けられ、その存在感を意図的に臙化されているが、「東京八景」に、外部から緊張をもたらしたのは山岸外史にちがいない。先に「東京八景」には不安が描かれていると書いたが、この小説が、過去を否定し現在を肯定する単純な構造に終わらなかつたのは、不安が作品に緊張をもたらしているからである。山岸外史は、作品の外部にあって、その不安を醸成したのである。⁷

第二の回想は、「私」が「東京八景」を書こうと決意した年の春と夏に見た二景を書いている。そのうちの一つは、大先輩の「Sさん」を訪問し、破門を解かれ、一日をともに過ごしたときのことである。上野、茅場町、銀座を巡った日の夕方の光景、新橋駅前の橋上で銀座方面を眺める「Sさん」と「その破門の悪い弟子の姿」を「東京八景」の

一つに選んだ。「その日は、親友の著書の出版記念会の發起人になつてもらひに、あがつたのである」とある。言うまでもなくこの「親友」が山岸外史で、昭和十五年三月にぐろりあ・そさえてから出た「芥川龍之介」の出版記念会の下相談であつた。昭和十五年四月五日付けの山岸宛はがきには「佐藤先生のところへは、昨日早朝まゐりました」とあり、「東京八景」にあるように芥川論を話題にし、「たいへん御機嫌よろしく、上野、銀座など、お伴して一日歩きました」とある。⁸この前後の山岸宛はがきにも、出版記念会のことは書かれていて、太宰が山岸のために骨を折つたことが分かる。「人間太宰治」によれば、出版記念会など「厄介」で「面倒」だらけにしか思つていなかった山岸の重い腰を上げさせたのは太宰であつた。このときも、「君は近頃、世間人になつたのじゃないだろうね」などとぼくがいい、太宰もかなりむくれたのだと思う」というようなことがあつたようだ。

この春の一景は、しかし次の増上寺門前の描写に比べてさほど鮮やかだとは言えない。そもそも肝心の銀座方面の風景が書かれていないし、「Sさん」の存在の重みもいまひとつ出ていないので、「Sさん」との関係修復の困難さや気まずさが表れず、わだかまりの消えた明るい気持ち素直に伝わつてこないのである。「れいの重い口調で」というよ

うに、実在の佐藤春夫に寄りかかっている点も弱いし、佐藤春夫に尊大さを被せない配慮からか、太宰の矮小化が目立つのである。

このように作品外部に参照を誘う書き方は、出版記念会の当事者である山岸への誠意の根柢を見せたかったのではないか、という読みをも立ち上らせる。「Sさん」との関係改善を前面に出し、山岸の気性を慮って名前を匿名の「親友」とし、出版記念会のことはさりと記すことでさりげなさを示す。人に世話をかけてばかりいた者が人の世話をやくことで、「俗物」の批判に抗する誠意を見せるのである。それを「俗化の仮面の完成^{*10}」とするのは、皮肉な見方が大人げない見方か意見の分かれるところであろうが、いずれにせよこの挿話は、山岸の次のような態度と比べると、やはり小さくまとまりすぎている点に、精神の闊達さを欠くように感じられる。山岸は、会の面倒を見てくれた太宰を「ほんとに出来た人間」だと感心し、しかるべき人には札状を出すようにとはがきに言い添えた太宰を「立派な大人^{*11}」だと書く。にもかかわらず、山岸が狷介で面白いのは、「しかし、ほくは札状はださなかつた」とあっさりと書くところにある。「東京八景」に登場しない、山岸外史は、見えないところで常にこの作品を緊張させているのである。

作中の「私」には、もう一人気になる人物、「T君」の敵

父がいた。戦地に赴く「T君」に「安心して行つて来給へ」と大声で激励すると、「ばかに出しやばる、こいつは何者といふ不機嫌の色が、その敵父の眼つきに、ちらと見えた」。おそらく、「私」が元の無頼漢のままであつたならば、「T君」の父の存在など気にならなかつたであろう。もとより、戦地に行く人に頼もしげなことを言う家父長制の擬似主体たることもなかつたらう。ささやかなりとも一家を構えたので、揺るぎない家長である「T君」の父の視線を付度することになつたのである。このとき「私」は「T君」の父の思いをはじめ知つたのであり、それは、ひいては「故郷の長兄」を知る、ことでもあつたはずである。そういうふうになつたに「知る」ことを通じて、「私」は第一の回想部分^{*}を、回想として語ることになるのである。第一の回想は、現在からの反省的意識によつて再編された語りになっているが、それは、関係を「喪失」してきた人々の視線を「私」が取り込んでいることを意味しているのである。「私」は、作中作「東京八景」を「誰にも媚びずに書きなかつた」と述べている。この思いが、「東京八景」を書く太宰の思いに通じていることは否定できない。「誰にも媚びずに書く」とは、他者の声を聞き入れないことではない。人の思いを織り込みながら「媚びずに書く」ことで、「東京八景」は、述懐ではなく手の込んだ小説になつているのである。

増上寺山門の一景を得て、私は自分の作品の構想も、いまや十分に弓を、満月の如くきりと引きしぼったやうな気がした。それから数日後、東京市の大地図と、ペン、インク、原稿用紙を持つて、いさんで伊豆に旅立つた。伊豆の温泉に到着してからは、どんな事になつたか。旅立つてから、もう十日も経つけれど、まだ、あの温泉に居るやうである。何をしてゐる事やら。

作品の末尾である。語りの位相が一人称から次第に三人称へ変容していることに気づくだろう。もつとも、作品全体は一人称で統一されているから、これは変容ではなく、「まだ、あの温泉に居るやうである。何をしてゐることやら」と客観性を装つてとほけてみたのである。しかし、これまでの一人称独白体の内容に、「俗物」と批判する声、あるいは山岸外史の批判を取り込み、また「T君」の父の視線、そしてその延長上に「故郷の長兄」を組み込んできたことを考えれば、こゝも、誰か別の声を混入させたと言えることができる。「ぶるぶる煮えたぎつて落ち」る「武蔵野の夕陽」が見える三畳間で、「この家一つは何とかして守つて行くつもりだ」と妻に言ったとき、「ふと、東京八景を思ひつ」き、伊豆の南の山村まで仕事のために来たのであるから、「私」が装った結末の語りには、妻の気持ちが籠められていると考えられるのだ。

事実においては、出発前の約束どおり太宰から電報が来て、美知子は宿泊代を持つて湯が野の福田屋まで行ったところ、太宰は仕事については「一言も」口にしなかつたという。「けれども鈍感な私にも容易な作品とは思はれず、東京八景」が「文学界」の翌年の正月号に載りましたときも五月に、実業之日本社から同名の単行本として出ましたときも、私には何だかおそろしいやうで、読むことが出来ませんでした」と書いています。^{*12}

では、作中作である「東京八景」は完成したのであるうか。「何をしてゐる事やら」という、執筆前の意気込みに比べると、とほけた韜晦としか思えない余裕からすれば、作品は完成したと考えるのが順当であろう。何をしているのかという疑問に妻の声を忍ばせるとすれば、それはなおさらである。しかし、安藤宏は次のように言う。

過去の自己を反芻し、再構成する中であらたな自己がみえてくる事態はついにおこりえぬわけで、作中の構想、「東京八景」の完成も又、困難なものとならざるを得ないのだ。^{*13}

確かに、「戸塚の梅雨。本郷の黄昏。神田の祭礼。柏木の初雪。八丁堀の花火」云々とつづく構想どおり作品が完成したかというところ全く不明で、これらの構想が展開されていないところからすれば、「困難なものとならざるを得ない」

かったという想像の方が現実味を帯びている。しかし、安藤は「あらたな自己」が見えてこない点を「困難」な理由としているが、過去を「再構成」すること自体が、「あらたな自己」の確認にはかなるまい。「新たな自己」が見えぬ理由を安藤論文の文脈に求めると、「過去が関係性の喪失の歴史として眺められる」からだということになる。しかし、過去は、見てきたように他者の思いを混入させて回想されているのである。それこそが、「あらたな自己」の生成であろう。「自分の苦悩に狂ひすぎて、他の人もまた精一ぱいで生きてゐるのだといふ当然の事実¹⁴に気附かなかつた」という第一の回想は、後に他者の思いを混入させることなしには、なしえなかつたはずである。

作中作の構想は、「私」のいる風景を書くことで、それは過去の実感的な風景であるから、現在の「私」がそれを見ることができない。ちょうど夢を目覚めてから思い起こしても、もはや夢そのものではないのと同じことである。柄谷行人は、島尾敏雄と庄野潤三を論じた評論で、「夢」について次のように言う。「要するに、われわれがふつう夢と呼んでいるのはすべて「事後の観察」である。夢の世界ではわれわれは文字通り夢中に生きているのであって、しかも生きていることとそれを眺めることに何の乖離もなく生きているのだ」と。「東京八景」の構想の端緒に立った「私」も、

「東京八景」の内部を生きたことと、「事後の観察」との間の断層を知つたにちがいない。風景の中にいたことはあくまでリアルな体験で、それを書くことは、すでに外部にいて断層に直面することでしかない。しかし不思議なのは、再度それを生きられないにしても、そのときのリアルな感覚だけは生ま生ましく残っている。夢の中から、目覚めた後に持ち越してきた感覚のリアリティはある。誠実に書くこととすれば、書くことができるのはそれだけである。とすれば、「東京八景」を書こうとした感覚を書くことが「東京八景」にならざるをえない。鮮やかな記憶としてある二景を、思い出す行為を含めて書き、書こうとする意図で脇を固めることで、やつとりリアリティをもちえる書き方を採ることができると、それは実作者太宰治が、「異常ないき¹⁵こみ」で「東京八景」を書こうとし、妻にもそれを告げ、そして書き上げた作品「東京八景」が、やはり「東京八景」を書こうとしたことを物語内容とする小説であつたことと同じである。

だとすると作中人物「私」が書いた「東京八景」は、「東京八景」を書こうとした太宰の作品「東京八景」とほぼ同じものになるはずである。「何をしてゐる事やら」というとばけた感想で終わる、その対象であり主体である「私」が書いた「東京八景」は、「伊豆の南、温泉が湧き出てる」と

いふだけで、他には何一つとるところの無い、つまらぬ山村である。」という書き出しをもつ太宰の作品に直結するのである。「何をしてゐる事やら」と語られ・語る対象と主体が溶解することで、フィクションとメタフィクションの同一性が示され、そして永遠に回帰しつづける構造に導かれる。これは、けつして作者の悪ふざけではない。それは、リアリティの置き場所が、風景や出来事そのものではなく、ありありと残る出来事感覚をもち、多の人の存在を想起して書く「私」にしかないからである。

【注】

- * 1 執筆時期については、山内祥史「解題」(第十次「太宰治全集」第十一巻、筑摩書房、89・10)による。
- * 2 安藤宏「『東京八景』論——作品論のために」(『国文学解釈と鑑賞』昭和62・6)
- * 3 山下真史「『東京八景』論」(山内祥史編「太宰治研究7」和泉書院、平成12・2)
- * 4 * 2に同じ。
- * 5 山岸外史「人間太宰治」(筑摩書房、昭和37・10、引用はちくま文庫、89・8)。
- * 6 本書、書簡番号35の【ノート】を参照されたい。
- * 7 山岸外史は「東京八景」の書評「太宰治——新ハムレット及び東京八景」(『文学界』昭和16・9)で、「平凡な

形式だが、——また稍々、私的主観に墮してゐる点があるやうだが、感覚は素直であつた。/(中略)これは、とまれ、失敗したものではない」と評している。

* 8 このはがきの所在は不明。『太宰治全集』第十二巻(筑摩書房、99・4)による。

* 9 山下真史に「風景描写がほとんどない」という指摘がある(* 3に同じ)。

* 10 山田晃「太宰治・作品事典 東京八景」(『国文学解釈と鑑賞』昭和49・12)

* 11 昭和十五年四月十五日付け山岸外史宛はがき(書簡番号43)。

* 12 井伏鱒二「解説」(『太宰治集』新潮社、昭和24・10)に引用された美知子夫人の手記。

* 13 * 2に同じ。山下真史も「東京八景」という小説が書けない小説だと言う(* 3)。

* 14 柄谷行人「夢の世界——島尾敏雄と庄野潤三」(『意味という病』河出書房新社、75・2、引用は講談社文芸文庫、89・10)。「事後の観察」は小林秀雄「ベスト」からの引用。

* 15 * 12に同じ。